

## 序説

山口大学大学院医学系研究科 放射線医学分野 松永尚文

高齢化に伴い、血管性病変を有する症例に遭遇することはますます多くなっており、その病態についてはCT・MRIなどのモダリティの進歩により、詳細な画像が得られるようになってきている。一方で、新しいデバイスが開発され、治療法もさらに進歩している。血管性病変の所見は多彩であるが、意外と本態が知られていないものも少なくない。所見が典型的な場合、サインは単純明快で便利であるが、所見を取り違えてしまうと、正しい診断に到達できないこともあり、また同じサインでもほかの疾患でも見られることもある。サインだけが一人歩きすることがあるので、本当の病態や画像の成り立ちを知ったうえで、適切に用いる必要がある。大動脈解離では、所見、用語、定義、病態などに混乱も見られる。また、疾患概念の変遷や治療前後の画像診断の役割についても知っておく必要がある。

以上のような観点から、血管性病変の概念、画像所見のポイント、似て非なるものの鑑別、画像所見と病態との対比や関連、治療や経過観察において重要な所見や、見逃してはならない所見などを短時間で把握できるような特集を企画した。

本特集では、画像所見や病態に焦点をあて、頸部2項目、胸部7項目、大動脈20項目、腹部10項目、末梢血管4項目、合計43項目を設定し、基本からupdateな内容まで網羅したつもりである。このほかにも多数あるが、誌面の都合で日常診療で遭遇する疾患や病態に絞らせていただいた。今回、Q & Aのスタイルで、あたかも指導医と会話しているような感覚で、親しみやすい形式をとった。Questionの設定では、特にvascular imagingの基本や核心を最も効率よく読者に伝えられるように工夫を凝らした。見開き2ページを基本にして、どこから読んでも読みやすく、コンパクトな内容を目指した。Questionに対する解答を、まず単文で箇条書きにして、その後、典型的な画像を提示し、そのエッセンスが学べる体裁をとった。

執筆をお願いした諸先生方は、血管イメージングに十分な経験をもち、最前線の日常診療に携わっておられる方ばかりである。ご多忙にもかかわらずご寄稿いただき、心から感謝する次第である。初心者でもvascular imagingの概要を短時間で楽しく学習できるようになっており、企画者の期待以上の充実した特集になった。本特集が、日常の診療に役立てば幸いである。